

新しい学びの文化の創造のために力塾の開塾に期待する 6年かけて、自分らしく生きる力を育てる

2018年8月20日

大阪府立富田林高等学校元校長

NPO 法人学びと育ち南河内ネットワーク元理事長

易寿也

力塾の開塾にあたって、塾長から何を書いても良いからと言うので、大阪府立初の併設型中高一貫教育校（以下富中高）の設立とそのための基礎になるスーパーサイエンスハイスクール（SSH）校指定に向けてともに夢を語り困難を乗り越えてきた仲間として思いの丈を書こうと思います。

この文章を書き始めたのは8月5日です。そう、力塾の一回目の保護者向けの説明会の日です。きれいに整備された顕微鏡や水槽に囲まれた実験室の隣にある、プレゼンテーションルームで小川さんの力塾への熱い思いを聞いていたのは僕ひとりでした。その内容の素晴らしさに感動しながら思ったのは、なぜこの思いが保護者に届かないのかという悔しい思いでした。



日本の常識は世界の非常識

大学入試と言えば、ともかく大量に暗記して、多くの過去問題を解き、ともかく机に向かう時間が勝負というイメージを持つと思います。しかし、世界に目を広げるとこの一発勝負型ともいえる大学受験は、隋唐の時代に遡る「科挙」の伝統でしょうか、いわゆる欧米からみた極東アジアである日本、韓国、中国等に特有の受験方法なのです。欧米はもとより近くはシンガポールなどの新しい国作りをめざす国では、高校時代の何をどんな風に学んできたのかというキャリア全体を評価することを大学への入学の基準にしています。日本型の点数で切り刻むやり方は、個性より大量に平均的な力を持つ労働力が求められた高度成長期には合ったのです。しかし、そのやり方では、今、大学や社会が求める課題解決力を持つ人材を集められない事が明らかになる中で、やっと日本も動き出したのです。世界の常識に近づこうとしているのです。世界では大学に良い人材を集めるために Admission Office (AO) という部署が大きな役割を占めています。ここでは、大学が求める学生像を明らかにして、高校時代の学びの実績を具体的に評価することで、社会や研究に貢献できるに人材を獲得しようと競い合っているのです。これは、例えばプロ野球のスカウトのようなものだと思えばわかりやすいでしょう。そこでは、一発入試でなく複数の学力検査や高校時代の研究活動やボランティア活動や資格が評価の対象になります。薄っぺらなペーパーテストだけではなく、その大学が求めている人物像が総合的に評価されるのです。

社会に貢献でき、大学の名を高めてくれる人材を集めたいのは大学として当然です。そんな人材をアドミッションオフィス (AO) が時間をかけて集めるのです。今、国立大学は30%をめどにAO入試を拡充する動きがありますが（阪大、お茶の水大などを先頭に）、日本も、2020年の大学入試改革で、確実にその方向に向かうと言

うことです。有力私立大学はさらに先に行っています。結論から言えば力塾の学びはそれを先取りしているといえます。

2030年の子ども達

文部科学省のホームページで「論点整理」という言葉を検索してみてください。これが、今回の入試改革の原点になっている文部科学省の問題意識です。「日本社会はこのままではどうにもならない」という危機意識の理由は、時代の先が見えないからです。過去の知識の積み重ねでは解決できない問題が山積しています。人口の絶対的な減少、世界一の少子高齢化。押し寄せる環境問題。従来の家族意識に依拠した社会構造の変化の必要性。民主的とは言えない社会構造などです。その一方で、大学生を見ていると、従順だが自分の考えを声に出せない学生達。前を向くより周りの空気を気にして、出る杭は打たれると感じている状況は、さらに進行しているとさえ思えます。ネットを通じた、不寛容と揚げ足とりの横行。これらの問題は決して日本だけの問題ではないのですが、元々閉鎖的な上に、有効な解決法を模索して前に進められていない点では、事態はより深刻だと考えられます。今や待ったなしです。

知識蓄積型の学びから生き方創造型への学びへの転換が求められています。学び方の姿勢とスキルを育てることが学びの中心にならねばなりません。もう一度言うと、核心は、直面している問い自体が今まで人類が経験したことのない答えのない問いであることであり、答えを出すことは、次の世代の子どもたちに託すしかないので

す。今年が明治 150 年と言われますが、その当時に今の人類社会の状態を想像した人がいたでしょうか。しかも歴史の変化の早さは加速度的です。わずか 10 年先を見通すこともできません。そこに必要なのは、それでもみんなにとっての「幸せ」を見つける意欲と柔軟な姿勢を持っているかどうかだけです。今ある知識がどれほど役立つかどうかは怪しいものなのです。

探究と貢献の意味

私たちが大阪で唯一の併設型中高一貫教育校を作ろうと提案した最大の理由は、生き方創造型の学びを中学生段階から提供したいと考えたからです。この学び方を探究型の学びと呼んでいます。現実の生活のなから解決すべき課題を見つけ、その解決に向けて仮説を立てて実行してみる。その結果をふり返り、次への行動につなげるというらせん型の学びです。これは、ここまで覚えたことをテストし、合格したら次の段階に行けるとい、ある意味分かりやすい単線型の学びのスタイルに比べてより複雑で実際の生活に密着した学びであると言えます。この学習の中心にあるのが富田林高校(以下富高)で言えば E タイムと呼ばれる「総合的な学習の時間」であり、その中心にいてモデルを提供してくれていたのが科学部の探究活動です。同時に、この学びは単なるスキルではなく学ぶことの価値を追究する学びであると考えています。それこそが、社会への貢献という価値だと考えています。

藤井 7 段(15 才)の衝撃

彼も公立の中高一貫校(名古屋大学付属)の現役生徒です。将棋と AI の関係については象徴的な事件がありました。相手から取った駒を自分の駒として打てると言った複雑なルールのために将棋の世界では長い間、AI は人間に勝てないだろうと言われていたそうです。しかし、昨年(2017 年)に AI のポナンザと言うゲームソフトが高橋名人を破ったという出来事です。しかしこれはある意味当然のことで、過去の棋譜を基本にした戦い方では、

1秒に10億手くらいまで読めるAIの処理能力に勝てるはずはないのです。もはや、AIの進化が想像以上であったというだけのことなのです。走る速さで自動車に勝とうという人などいないと言うことと同じです。人間と自動車は共存できるのです。それより重要なのは今年の6月の竜王戦において、全てのAIが悪手とした一手で藤井7段が勝利して一同を驚愕させたという事件です。しかしこれも考えれば当たり前のことで、AIは過去のデータの蓄積には無類の力がありますが、人間によるプログラムによって動いている以上、未来の未知の課題にむけての創造や工夫は不得意なのです。ここにAIと人間との共存の可能性が生まれるのです。

そうであるなら、今人間に求められているのは、AIにすぐにとって代わられるような知識の蓄積ではなく「自分の頭で考える力を鍛える」ことです。もちろん基礎的な知識は必要ですが、もっとも求められているのは、頭を柔軟にして問題解決に向けての知性や理性を動員した「人間力」です。これらの事は、学び方のパラダイムシフト（枠組みの変更）が必要になっていることの衝撃的な現実を示しているのです。考えれば世界の恒久的な平和を実現するのもAIには無理でしょう、何故ならそんな時代はなかったのですから。今求められているのは「人間力の復権」だと言えます。知性と理性と想像力が求められています。これは多様な価値観を持つ人々が対話することから生まれるのだと思います。人間は人間としての特性を最大限に生かして生き延びるしかないのです。

必要なのは、自分の頭で考え判断できる力です。これを私たちは探究力や課題解決力と呼んで取り組もうとしています。私たちの取り組みに時代の方が追いついてきたとも言えます。一夜漬けではできない息の長い学びへの改革が求められます。この力を育てるための取り組みは、早ければ早いほどよいと思います。

時間は待ってくれません

小川さんは、高校という組織の中では新しい入試への対応には間に合わないと感じ危機感を持ち、あえて安定した職場を離れて、私費を投じて私塾を開設しました。この開塾の意図は何よりも富中高の生徒の探究力の育成を支援するためです（もちろん他の学校からの入学者も大歓迎しています）。

この塾には決まり切った学習プログラムはありません。あるのは「学生科学賞」や「自由研究発表会」等のコンテストへの挑戦とそこで高位の成績を取るという具体的な目標です。ここで培った力は理科系の分野だけでなくあらゆる分野での活躍を支えてくれる力になるはずです。

私は、彼のチャレンジを富田林の宝としてなんとか支えたいと思っています。本人は絶対に言わないでしょうが、彼のような貴重な人材は大学などからも引く手あまただと思います。彼にも生活があります。夢を食べるバクのように生きていけません。なんとか彼の塾を持続するためには、みんなからの支援が必要です。試行期間にはたくさんの生徒がきてくれ力塾は活気に満ちあふれていました。しかし正式のスタートになるとパタッと人がいなくなりました。磨けば光る原石がゴロゴロいるのに本当に惜しいことです。「所詮部活の延長だからそれに熱中しないで勉強しなさい」という声も聞きます。しかし、ここでの学びや学びの共同体としての切磋琢磨が、必ず人生の中で生きます。近い将来に力塾の塾生から世界を動かすようなユニークな俊英が育つと確信しています。

支援グループとしてすでに現役をリタイアした学者や研究者の方々を募っています。そうそうたるメンバーの協力も取り付けています。ここには学びと育ちの異空間が出来上がるはずです。

新しい学びにかけてみませんか

従来の富高生でいわゆる難関大学に合格した生徒には、いわゆる進学塾に通ったものはいません。受験のための基礎力は富高の授業をしっかりとマスターしたら良いのです。それは、富中高の教師の責任です。プラスアルフ

ア-の刺激を受ける場所こそが必要なのです。

今年の学生科学賞を取るには時間がありません。すでに昨年の研究活動での全国大会への出場の成果で阪大の適塾入試の資格を得た生徒もいるようですが、それに続いて、今年もそれ以上の成果を上げるには時間は余りありません。気持ちだけが焦るのですが、生徒がきてくれなければどうにもなりません。それを武器にして難関大学のAO入試を突破するのです。この探究活動で学んだ学び方はどの分野でも生きる一生ものの宝です。

大学は日本だけではありません。東大と言っても世界ではベストテンどころか20位にも入っていません。僕の大学時代の親友の息子にS君という青年がいます。彼の歩んでいる道はまさにグローバルを実践する生き方です。高校二年の時にアメリカの高校に留学して、大学は神戸大学を卒業したのですがアメリカの学生生活が忘れられず、修士をアメリカの大学で取得して、博士は神戸大学で取ったそうです。この資格を生かした仕事をしたいと、世界銀行にネットで応募して見事合格して、今は家族はドバイに住んで、平日はバングラデシュの難民支援に携わっているのだそうです。こんな風に、より良い世界づくりに貢献できる、世界のリーダーのひとりとして活躍する生き方を選択する生徒が育ってほしいものです。舞台は「富田林から世界へ」なのです。

子ども達を中心において、富田林に力塾有りとなりに響き渡るまで一緒に汗をかいてみませんか。

通塾率について —中高一貫6年間連続型教育の意味と可能性—

注目すべきデータがあります。首都大学東京の西島央（ニシジマ ヒロシ）准教授の「公立中高一貫校中学生の生活・意識・行動に関する調査方向」（2011年）[人文学報 no.441]という調査によると、習い事以外の学習塾への通塾率について東京の一貫校の中学生と富中の生徒の間には大きな差がある事がわかります。どちらも富中高と同じような長い歴史と実績を持ちながら、併設型都立中高一貫校に改編した学校ですが、A校が26.4%で、B校が36.0%であるのに対して、富中の一期生の通塾率は63.2%なのです。しかもこの数字は、高校受験のある東京都の他の中学の58.9%より高いのです。これは驚くべき差です。この背景には、東京では平成18年（2006年）以降の改編で公立中高一貫校（5校が併設型中高一貫教育校、5校が中等学校）も多く、一貫教育への高い評価が定着している事が考えられます。私自身が、両国と白鷗という「公立の逆襲」と言われた学校に訪問したときに驚いたのが次のような教頭の自信に満ちた言葉でした。「せつかく高校受験のないことでの時間的な余裕ができたのに、学習塾通いでは意味がないではないですか。意味がわかりません。逆に学校の授業を軽く見るだけです。これは無駄です。この高校受験勉強に使わない余裕の時間に、自分の学校の生徒にはそれぞれの良さを伸ばすために部活やボランティアや探究活動などいろいろな事にチャレンジすることを求めています。特技を磨いている生徒もいます。これらの全てが大学入試に生かされるのだと考えています。そもそも基礎学力の保障は学校の責任です。経済的に厳しい家庭も多く、塾に通わせるような余裕はないと思いますよ。そもそも学習塾に通わせる必要がないのが中高一貫校の魅力です。これこそが新しい学び方の文化です」と。この自信を支えているのは、保護者や生徒の学校への信頼であり、中高一貫校の特色をしっかりと理解して高校入試のないことの良さを最大限に生かしている保護者と学校の共通理解なのではないかと思えます。富中高も同じような教育の（ある面ではそれ以上の）質を持っており、これから歴史を積み重ねていかねばならないのです。

力塾は塾と言っても進学塾ではなく、頭を柔軟にして、仲間と切磋琢磨しながら鍛え上げる「道場」と言っても良いような場所だと考えられます。受動的に教え込まれる学習塾から、少し時間はかかっても自分が考え始めることによって、共に学ぶ仲間を見つけ、知的好奇心を伸ばすことができる場所としての力塾を子どもの可能性を伸ばす場所として考えてみるのも良いのではないのでしょうか。異年齢で刺激し合えるこのような場所は今の時代にはなかなかありません。私の教員生活を通して考えたのは、今の日本の教育では、高校入試が子どもの学ぶ姿

勢をだめにしているのではないかということです（もちろん我慢することや嫌なことでもやり続ける力は育つでしょうが）。

追い立てられるように知識を詰め込む従来型の勉強をするのではなく、この一番頭が柔らかい時間にこそ、探究型の学びのスタイルを育てる必要があると考えます。世界はその方向に進んでいます。これこそが大阪で唯一の中高一貫校を作った事の意味です

岸本先生が支えてくださった意味

富田林高校の先輩には、岸本忠三という世界的に著名で、ノーベル賞に一番近い一人と言われている免疫学者がいます。大阪大学の総長も務められ、教育者としても有名です。「インターロイキン6」という物質を世界で初めて発見し、それを防ぐことで、不治の病と言われてきたリウマチの特効薬を作りました。ノーベル賞に次ぐ賞であるスウェーデンのクロフォード賞の授賞式では「この薬の発明で、これからはリウマチで車イスを使わなければならない人は世界からいなくなるだろう」とまでたたえられました。

富田林高等学校中等学校の設立において、岸本先生からは、物心共に強い支援を頂きました。「阪大で話していると大阪の南の方には何もないと言われる。実際実家(中野町)に帰ってみると、大きなスーパーもつぶれ、地域は廃れるばかりだ。」「新しい学校を創って地域の活性化の中心にできないか。」「進学ばかりが目標ではないけど、阪大医学部にきているのは私学の中高一貫校の生徒がほとんどだ。頭は良いけど物足りない。富中高からは人間性の豊かな骨太の学生を送り込んで欲しい。」「医療の世界でも、手術はダビンチというAIの方が技術は高い。これからの学生に必要なのはAIにできない自分で考える力や。」「どんな大きな発見もなんでやろうという素朴な疑問から始まる。それを大切にしたい。」「世界には多様な人がいるという事実を早く経験して世界を視野に活躍する人間が育って欲しい。」「人の役に立つ人間になって欲しい。」など、その言葉の一つ一つが心に響きます。岸本先生の生き方こそが私たちがめざす探究と貢献のロールモデルだと言えます。

新しい学び方への道は開かれている

今、どこにもない新しい学びのとりくみが始まろうとしています。やがてこの学び方は日本中にひろがるでしょう。千載一遇のチャンスと一緒にかけてみませんか。選ぶのは皆さんです。力塾の教室が実験道具やプレゼンを前に自由で闊達な子ども達であふれる。その雰囲気の中で刺激合ってより高い段階にステップアップする。力塾はそんな場になります。

子どもを中心に、学びと育ちの共同体作りに参加してみませんか。変化への柔軟性と意欲で今を一生懸命興味津々に生きることこそが子ども達を幸せにしてくれます。

力塾は進学塾ではありません。子ども達が学ぶ事に興味関心をかき立てる場所です。そこには同じような高い志を持った仲間や先輩が集い、何よりも学びのツールがたくさんある異空間です。なにかを一方的に押し込まれるわけではなく、三々五々。実験道具やホワイトボードを前に自由に話し合っ自分です決めた研究テーマを深めていくための切磋琢磨がある場所です。年齢も名誉教授と言われた大先生から、つい最近の富高の卒業生まで年齢も分野も異なる学びの空間です。

実際の適塾に行ったことがありますか？古民家の二階に古い広い部屋があるだけです。ここに、明治の改革に向けて、全国から若者が集まり、医療やこれからの日本について話し合ったのです。そして多くの人材がここから育ち、明治の国作りの中心人物になったのです。その場に立つと熱い熱気が感じられて今でも心が熱くなります。この場で互いに切磋琢磨して、互いの地頭（じあたま）を鍛えたのです。力塾はきれいですが、めざす内容

は現在の適塾です。何しろ時間は6年間あるのです。だから持続的な学びこそが大事です。今、有名学習塾も含めて様々な人たちが力塾の動きに注目しています。このよう学びの場は一朝一夕には作れないのです。子ども達の未来に先行投資して見ませんかというのが僕からの提案です。一緒にこれからの子どもたちと社会について考えてみませんか。